

武蔵野日曜集会

信仰義認

ローマ書第4章1～25節

1978年4月2日(武蔵野)

小池辰雄

実存的信仰 己を否とする 信の世界からこぼれてくる行為 あるがままに自分を投げ出す 全面的に受けとる キリストと一つになることが信 無きものを有るものとして 望みへの望みを越えて 黙って出かけた 気迫を捉む 無が即ち一如

【ロマ4:1～25】

1 然らば我らの先祖アブラハムは肉につきて何を得たりと言わんか。2 アブラハム若し行為によりて義とせられたらんには誇るべき所あり。然れど神の前には有ることなし。3 聖書に何と云えるか『アブラハム神を信ず、その信仰を義と認められたり』と。4 それ働く者への報酬は恩恵といわず、負債と認めらる。5 されど働く事なくとも、敬虔ならぬ者を義としたもう神を信ずる者は、その信仰を義と認めらるるなり。6 ダビデもまた行為なくして神に義と認めらるる人の幸福につきて斯く云えり。曰く、7 『不法を免され、罪を蔽われたる者は幸福なるかな。8 主が罪を認め給わぬ人は幸福なるかな』9 然れば此の幸福はただ割礼ある者にのみあるか、また割礼なき者にもあるか、我らは言う『アブラハムはその信仰を義と認められたり』と。10 如何なるときに義と認められたるか、割礼ののちか、無割礼のときか、割礼の後ならず、無割礼の時なり。11 而して無割礼のときの信仰によれる義の印として割礼の徴を受けたり、これ無割礼にして信ずる凡ての者の義と認められん為に、その父となり、12 また割礼のみに由らず、我らの父アブラハムの無割礼のときの信仰の跡をふむ割礼ある者の父とならん為なり。13 アブラハム世界の世嗣たるべしとの約束を、アブラハムとその裔との与えられしは、律法に由らず、信仰の義に由れるなり。14 もし律法による者ども世嗣たらば、信仰は空しく約束は廢るなり。15 それ律法は怒を招く、律法なき所には罪を犯すこともなし。16 この故に世嗣たることの恩恵に干らんために信仰に由るなり、是かの約束のアブラハムの凡ての裔、すなわち律法による裔のみならず、彼の信仰に倣う裔にも堅うせられん為なり。17 彼はその信じたる所の神、すなわち死人を活かし、無きものを有るものの如く呼びたもう神の前にて我等す



べての者の父たるなり。録して『われ汝を立てて多くの国人の父とせり』とあるが如し。18彼は望むべくもあらぬ時になお望みて信じたり、是なんじの裔は斯くの如くなるべしと言ひ給いしに随いて多くの国人の父とならん為なりき。19斯て凡そ百歳に及びて己が身の死にたるがごとき状なると、サラの胎の死にたるが如きとを認むれども、その信仰よわらず、20不信をもて神の約束を疑わず、信仰により強くなりて神に栄光を帰し、21その約し給えることを成し得給うと確信せり。22之に由りて其の信仰を義と認められたり。23斯く『義と認められたり』と録したるは、アブラハムの為のみならず、また我らの為なり。24我らの主イエスを死人の中から甦えらせ給いし者を信する我らも、その信仰を義と認められん。25主は我らの罪のために付され、我らの義とせられん為に甦えらせられ給えるなり。

● 実存的信仰

1 然らば我らの先祖アブラハムは肉につきて何を得たりと言わんか。

信仰のことについてパウロはアブラハムをもつてきた。さすがにパウロですね。アブラハムは何と言つても、信仰の父と言われる人で、新約聖書の一歩先に、

「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリスト」

と書いてある。キリストはアブラハムの裔ということですよ。即ち、信仰の祖アブラハムを継ぎ、また王者の裔として、王中の王である。アブラハムことは、かつて創世記でやりましたから、皆さんはご存知のわけですが。

「アブラハムは肉につきて何を得たりと言わんか」とは、生来そのまま何を思い出したかということ。即ち、「肉」というのは、「生来の我」というものが「肉」ですから。

2 アブラハム若し行為によりて義とせられたらんには誇るべき所あり。然れ

ど神の前には有ることなし。

もし、アブラハムが行為でもって神さまに義とされる、義しいとされるならば、誇るべきところがあるけれども、神さまの前には誇るべきところがないという。これですぐ対照になるのがヤコブ書です。ヤコブ書2章21～26節、

「21我らの父アブラハムはその子イサクを祭壇に献げしとき、行為によりて義とせられたるに非ずや。」

これです。行為によつて義とされたのではないかと。

22 なんじ見るべし、その信仰、行為と共にはたらき、行為によりて全うせられたるを。

「その信仰、行為と共に働き、行為によつて全うされた」と、このヤコブの論理はちゃんと辻褄が合っている。普通の人を読んだら、ヤコブの言う通りです。また、我々もヤコブの



言う通りと、ある面からは言わざるを得ない。

²³ またアブラハム神を信じ、その信仰を義と認められたりと云える聖書は成
就し、かつ彼は神の友と称えられたり。

ちゃんとそこまで知っているんだよ。「アブラハム神を信じ、その信仰を義と認められたり」と創世記15章をちゃんと引用しているわけです。

²⁴ 斯く人の義とせらるるは、ただ信仰のみに由らずして行為に由ることは、
汝らの見る所なり。

「信仰だけではダメだ。行為、行為だ」と言っているんだけど、信仰を無視しているわけではないと。正にカトリックがヤコブのこういう角度をハッキリと捉つかんでやっているわけです。それ自身は何も悪くはない。

²⁵ また遊女ラハブも使者を受け、

これはヨシユア記2章から6章にかけて書いてある。ラハブはキリストの系譜にも出てくる。

これを他の途みちより去らせたるとき、行為によりて義とせられたるに非ずや。

そうやって助けたではないかと。だから、如何に立派そうに見えても、遊女の方が本当の愛の行為をしたと。

²⁶ 靈魂たましひなき体からだの死にたる者なるが如く、行為なき信仰も死にたるものなり。」

(ヤコブ2・21～26)

ヤコブの「信仰と行為」をもう少しハッキリ言いますと、実存じっけん的信仰です。その実存的信仰はヤコブの言う通りです。ヤコブは非常に行為面を強調している。行為がなかったら結局空しいと。ところが、パウロは実は非常に行為者であった。行為を重んじていた。律法の義については責むべきところなきほどに、彼は立派な行為をした。けれども、それでもダメだと。そこで、パウロは信仰と行為のそういうったヤコブ的構造をもう一つ乗り越えて、「信仰のみ」というところに徹したわけです。

●「己」を否とする

創世記15章、アブラムもサライも、もう歳が進んで、子供なんかできる年輩ではなかった。百歳ですからね。ところが、

「⁵ 斯かくてエホバ彼を外に携え出して言いたまひけるは、天を望みて星を数え得るかを見よと。また彼に言いたまひけるは、汝の子孫は是のごとくなるべしと。」

汝の子孫は無数に増えていくぞと。

⁶ アブラム、エホバを信ず。エホバこれを彼の義となしたまえり。」(創世記

15・5～6)

エホバに「アーメン」と言いました。エホバをアーメンとした。「アーメン」という字は「エ



メツ」という字ですが、「真理」とか「真実」という意味です。

「アブラムは、神さまの言うことは本当だとしました。そうしたら、神さまは、よろしいと言いました」という意味です。

「エホバはこれを彼の義となしたまえり」

というのは、簡単に言うのと、そういうことです。「セデク(義)」となした。

アブラムには、神さまの仰ったことは自分の経験や判断や常識を超えている。子供ができそうもないときに、「子孫が空の星の如くなる」なんていうことは。百歳まで子供がななんだから。だから、全く自分の判断を乗り越えて、ただ神さまに100%に「はいっ」と言っただということだ。神さまを「然り」とする。神は靈然たる者、これに「然り。はい」と言いました。即ち、自分に対しては「否」なんだ。

「信ずる」とは、自分を否定して、自分の判断がよかろうが悪かろうが、そんな相対的なものは乗り越えて、相手を絶対視すること。相手は神さまだから。それが「信ずる」ということです。神の一切を全的に「然り」と言うことが「信ずる」ということ。「神さまは在る」ということを信ずるのではない。客観的に「神は在る」ということを信ずるのは、何も信仰ではない。神を相手として、二人称として、汝として、汝に対して「然り」と答えることが「信ずる」ということです。

間違えないでくださいよ。大体、神さまから呼ばれてしまっているんですから、客観的に在るも何もありません。在るから神さまが呼んでおられるのであって、だから、こっちは神の声に呼ばれたんだ。神の手に捉えられた。どこまでも神が主体なんです。我は客体なんです。主体たる主なる神に、「汝は然り」と言うときには、私に対しては「否」であります。

「己を憎まずば、わが弟子となることはできない」

とキリストが言われた。自分を捨ててかからなければ、信仰は成り立たない。自分を捨てない限りは。だから、私は「無者」と言っている。「我もなく、世もなく」と、さつき讚美歌で歌ったでしょ。あれだよ。

だから、「信ずる」とは何ということもない。

「無我とする。己を否とする。汝を然りとする」ということ。そういう気合の問題なんだ。

●信の世界からこぼれてくる行為

キリストは神さまを「お父さん」と言っただけで呼んでおられた。そして、お父さんの言うことを100%に受けとっていた。100%に受けとった彼が本当の「信」なんです。キリストこそアブラハムの信をもつと徹底的に受けとった。100%に、「汝の聖意を」といって、本願だけ



を受けとって動いていた。彼にも悲願はあったでしょう。けれども、いつも悲願を乗り越えて、本願だけを受けとって行つた。本当に受けとると、行が生ぜざるを得ない。「信仰と行為」といつて二分して考えて、「行為なき信仰」なんて言わなくなってしまう。ヤコブの言っていることはそれ自身、真理だけれども、本当の信が来ると、これが行為としてこぼれてくる。けれども、人間はだめなんだ。だめだから、そこでこぼれてくるけれども、信仰が完全に一如になかなかない。本質的には信行一如の角度でなければダメです。そうでもない行為がたとえ出ても、その行為は本当の行為ではない。立派な行為が出るよ。けれども、この行為が破れ行為であつても、この信が本ものだと、この破れ行為は立派な行為よりも本当の行為なんです。

カントが道徳哲学でその角度からものを言っている。

「どんなに立派に見えても、それは本当に善き良心から、意志から発していなければ、それは本当に道徳的とは言わない。けれども、本当に善き意志から発しているなら、その行為が破れたような惨めな行為であつても、それは本当に道徳的である」

という。生まれつき頭の良い人が、あまり勉強しなくても、ほとんど100点をとる。片一方の人はどうもうまくない。けれども、一生懸命でやっている。一生懸命に努力精進して70点をとった。人を見ると、90点や98点をとった方が、その70点よりか良いと思う。けれども、道徳的にはどちらが本当かという、70点の方が本当なんです。その人が道徳的に努力精進しているその姿です。カントはそういう角度からものを言っている。それが信仰の世界でいうと、本当の信の世界からこぼれてくる行為は、いい加減な信からこぼれてくる行為よりも立派そうに見えるなくても、これは本ものだというんです。行為を問題にすると反って躓きになる。反って苦しくなる。信仰が反って本ものでなくなってくる。そこを本当に見るのは神さまだけです。人間はいつも見そこないをやる。

●あるがままに自分を投げ出す

正に神の意志に「然り」と言つて従つて行つた、その信。アブラハムはその信仰を義とされたのではないか、創世記15章7節にある通りだと言う。

4 それ働く者への報酬は恩恵といわず、負債と認めらる。

行為をする者の報酬は恩恵といわないで、負債という。即ち、報酬は債務を果たすわけです。

5 されど働く事なくとも、

行為がなくても、

敬虔ならぬ者を義としたもう神を

非常にハッキリと言う。「敬虔ならぬ者」とは罪びとのことです。敬虔でない者、ダメなやつをも、神さまに「はい」と言つて全面的に自分を投げ出していくと、それを義としたも



う神である。

信ずる者は、その信仰を義と認めらるるなり。

いわゆる実存がどうであろうとこうであろうと関わりない。とにかく、在るがままの自分を投げ出して、「はい」と言つて神さまに従う。神さまに「然り」と言つと、その信仰を義とされる。簡単に言えば、

「神に然りと言つときには、義しと言われる」ということです。

「信仰義認」なんていう言葉は私はあまり好きではない。好きではないけれども、これをしよつちゆうプロテスタントで言うから、逆説的にあげたんです。こんな観念的な言葉で、あなた方はいい気になつたらダメだよ。「信仰義認」とは、

「神さまに然りと言えば、義しとされました」ということだ。

6 ダビデもまた行為なくして神に義と認めらるる人の幸福につきて斯く云えり。曰く、7 「不法を免され、罪を蔽われたる者は幸福なるかな。8 主が罪を

認め給わぬ人は幸福なるかな」

「認め給わぬ」ということは、そこに罪がないということではない。「罪を見逃してしまわれた」ということ。これは有名な詩篇32篇の、アウグスティヌスが非常に好きだった言葉なんです。彼は散々迷い歩いた。彼は病床にこの言葉を掲げて、それを瞑想して死んだと言います。詩篇32篇の、

「その愆をゆるされ、その罪をおおわれしものは福いなり。2 不義をエホバに負わせられざるもの、心にいつわりなき者はさいわいなり。」(詩篇32・1～2)

「あるがままに自分を投げ出す者は幸福だ」

と云うことです。「いつわりのない」というのは、「真実でもつて、ちつとも嘘を言わない」と、そういうことではない。あるがままの自分をそのままさらけ出すことが、「いつわりのない」ということです。「あるがままの自分を投げ出す」ということが「碎けている」ということです。パウロの引用よりも、詩篇そのものの言葉の方がなお本当ですから。

●全面的に受けとる

そういうわけで、パウロがどれほどキリストにぶつかって、自分が碎かれたか、こういう言葉を引用するところを見ても分かる。「行為、行為」と言つたと。

9 然れば此の幸福はただ割礼ある者にのみあるか、また割礼なき者にもある

か、我らは言う『アブラハムはその信仰を義と認められたり』と。10 如何なるときに義と認められたるか、割礼ののちか、無割礼のときか、割礼の後ならず、無割礼の時なり。



創世記の15章から17章を見ると分かりますが、本当はそんなことはどっちだっていいと言うんです。

11 而して無割礼のときの信仰によれる義の印として割礼の徴を受けたり、

割礼の徴をあとから受けた。これは洗礼のこともそうなんですよ。「割礼の無割礼の」「洗礼の無洗礼の」と、そんなことは問題ではない。問題は御霊のバプテスマを受けたかが問題です。パウロもペテロもヨハネも、使徒行伝の使徒たちはみんなその角度からものを言っている。ざるを得ないんです。「ざるを得ない」で動いている。「ねばならない」ではない。

これ無割礼にして信ずる凡ての者の

信ずるすべての者、例外なし、どんな人でも。極悪人であろうと、

「参りました!」

と言って受けとれば、十字架上の盗賊は、キリストと一緒に一番先に天界へ往ってしまった。キリストは、

「汝、今日、我と共にパラダイスだ」

と言ったんだ。

義と認められん為に、その父となり、¹²また割礼のみに由らず、我らの父ア

ブラハムの無割礼のときの信仰の跡をふむ割礼ある者の父とならん為なり。

だから、このパウロの言っている「信ずる」という言葉が、どんなに凄い言葉だか分かったでしょ。一般に言っている「信ずる」なんていうのではない。

「全面的に受けとる。自分を全面的にその中に入れる」

ということですよ。

●キリストと一つになることが信

私は、

「信仰は最も凄い行為だ」

と言っている。「信即行」というのはその意味なんです。外側の行為のことを言っているのではない。信ずるとは、全存在をその中に投げ込んで、「はいっ」と言っている。ただ「はいっ」という声ではない。存在的な叫びです。それは本当は内的行為なんです。自分を投げ出しているという一番深い行為です。「己を捨てよ」ということは、「神さまの中に、キリストの中に己を捨てる」ことが、信ずるということ。それが本当の信です。もうひとつ言え、

「はじめのことは、¹³太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。」(ヨハネ1:1)

という。この「言」はキリストであった。即ち、キリストという言に、こちらの人間が一つになるのが信という。キリストと一つになることが信。キリストを一如に受けとることが信です。



ヤコブの言っていることは、それ自体としては一つの相対的真理性は持っているけれども、そんな呑気なことを言えなくなってしまう。パウロの気持ちがあつたでしょ。ヤコブさんをけなすわけではない。そうでないような信仰がたくさんあるから、ヤコブはあ言わざるを得なかつた。ヤコブも御霊の世界にいたから、信仰と行為をなにもヤコブ自身が分けて、ゴタゴタやっているのではない。けれども、ヤコブが一生懸命で、

「本式の信仰がないのでしようがないな、行為のない信仰なんてダメだ」

と言っている。ヤコブの本当の気持ちと、パウロの本当の気持ちは決してずれてはいない。表現が違つてしまった。違わざるを得なかつたんだ、ヤコブも。だから、パウロというのは何と言つたつて、徹底的に使徒の中で一番凄い。

「行為をどうだこうだと言わないでも、知らない間に行為をしているではないか。何と

信仰とは素晴らしいものではないか、生き生きとした活動的なものではないか」

と、ルターが『ローマ書の序文』で信仰のことを言っている一言です。ルターはそういう意味でパウロに本当に共鳴している。

「信仰によりて義とされる」という。これを観念的に受けとつて、気休めになっている。では、そのような信は如何にして現実化するかというと、聖霊のことが問題になつてくる。話はどちらから持つていっても、いつも帰するところは一つなんです。帰するところが、「20214」と数学で分かるように、あなた方が頭で分かつたら、いつまでたつてもダメだよな。言われる度に、語る度に、私はその世界に質的にぐんぐん入っていくだけの話。神の言葉を本当に食うから、食物を食べるよりも、私たちの魂は本当に生きてくる。いいですね。

●無きものを有るものとして

13 アブラハム世界の世嗣たるべしとの約束を、アブラハムとその裔との与えられしは、律法に由らず、信仰の義に由れるなり。

ここに「信仰の義」という言い方もハッキリしている。信仰によるところの義、全面的に受けとることによつて義とされる。だから、「認められる」という「認」という字が観念化して、いかんです。「義とされる」でいい。「義がそこに成る」という言い方です。

14 もし律法

律法は「ノモス」という。

による者ども世嗣たらば、信仰は空しく約束は廢るなり。

その通り。ガラテヤ書3章15節に書いてある。

15 それ律法は怒を招く、

「すべし、すべからず」は、それができないものだから、神の怒りを招く。

律法なき所には罪を犯すこともなし。

罪を犯していても、それを罪とされない。律法のない世界ではいわゆる律法違反というこ



とではないものだから。

16 この故に世嗣たることの恩恵に干らんために信仰に由るなり、
 そういう恩恵にあずかるために信仰に由るなりと。「信仰によって世嗣となるのである」と
 言ったつていい。

是かの約束のアブラハムの凡ての裔、
 アブラハムの信仰を受け継ぐすべての人、

すなわち律法による裔のみならず、彼の信仰に倣う

彼の信仰によるところの、

裔にも堅うせられん為なり。17 彼はその信じたる所の神、すなわち死人を活
 かし、無きものを有るものの如く

有るものとして、

呼びたもう神の前にて我等すべての者の父たるなり。

17節は大事なところです。「彼はその信じたる所の神、すなわち死人を活かし」とある。ヨ
 ハネ伝の5章にキリストが言っている言葉がある。

「21 父の死にし者を起こして活かし給うごとく、子もまた己が欲する者を活か
 すなり」(ヨハネ5・21)

と。父は死人を甦えらせた。イエスも幾人か甦えらせた。ラザロが一番ハッキリした例で
 すが。

「無きものを有るものの如く呼びたもう神の前にて我等すべての者の父であ
 る」

と。「無きものを有るものとして」ということ。

「光あれと言いたまえば、光ありき」

でしょ。初めは光はないんだ。そこは混沌として闇なんだ。そこに

「光あれと言いたまえば、光の無かったところに光があつた」

と。無から有に変わる。そこに生ずる。あるいは、「成る」という段階があるわけです。有
 るものが生じたから有るので、成つたから有るといふ事態になる。無において既に神さま
 の側では有が隠されているんです、無の中に。だから、ここに現象として有が生ずる。本
 当はこれは有るんです、無いというけれども。神の側では、神の心の中にちゃんと有る。
 言葉と行為と共に有るといふ現象。私たちの知覚するところの現象の中にやつてくる。と
 ころが、我々は、もしこの現象を追っていたならば、信仰の世界は成り立たない。

「この無の世界にも、凄い有があるということを受けとる」

ということが信ずるといふことなんです。

アブラハムがそうではないですか。とても今は有りはしない。けれども、神さまは

「空の星の如く造る」



と仰ったから、その神の言葉を本当に受けとった。即ち、神の心の中では、意志の中ではもう存在しているんです、アブラハムの子は。受けとったら、有ということになった。生成ということがここに生ずる。

「光あれ」

ということとは

「光成れ」

ということ。

「光成れと仰ったならば、光があつた」

と。無きものを有るものとして呼びたもう。私たちは今、三日月である。けれども、必ず満月になる。満月になるものとして私たちを信じかかつていてくださるのが神さまの本願の恩寵の世界です。人間はただ現象だけを追って、「どうだ、こうだ」と批評ばかりしている。それではお互いにダメになっていくだけの話です。それを突き抜けたようなことを言っているのがブラウニングだ。あの詩人はやはりそういう面魂つらだましいがある。いつも本当の現実のようになっている。

●望みへの望みを越えて

録しよして『われ汝を立てて多くの国人くこじんの父とせり』とあるが如し。

「多くの人の父」というのは「アブラハム」という言葉です。

¹⁸彼は望むべくもあらぬ時になお望みて信じたり、是なんじの裔すえは斯くすくの如くなるべしと言ひ給たまひしに随したがいて多くの国人の父とならん為なりき。

「望むべくもあらぬ時になお望みて信じたり」

とある。ギリシヤ語をそのまま訳した方がおもしろい。「望みへの望みを越えて」というギリシヤ語なんです。「望みへの望みを越えて」というのは——「望みに対する望み」というものはないんですよ——そいつを乗り越えてということなんです。望みに対する望みがないというんだから絶望的だね。希望に対する希望がない。希望を希望しようと思つても希望がない。それを乗り越えてというのが、このギリシヤ語の言い方なんです。非常に愉快な言い方です。望みへの望みを乗り越えて信じたという。絶望的な状態においてもなお信じた。いわゆる人間的な、相対的な望みなんかは問題にしないで信じていく。そういう望みは「願望」です。本当の希望というのは上から来る。未来から現在に向かつて来る。超越界から相対界にやって来る。それを受けとることが希望なんです。こつちからお願まこといするのが願望です。だから、本当の希望は「本願」と同じです。「神・キリストの本願」、これが本当の希望なんです。これは必ず成就する。本願成就だから。神さまの御意まことは真です。真というのは必ず成就する。成就しないのは偽りです。ただ現実において、相対界においてなかなか成就しない。これは人間の罪のために、こつち側が成就させないことをやっているから。



けれども、平伏して進んで行けば、必ず成就する。だから、楽しくてしょうがない。

「私は天から賜ったこういう才能をその方面で突撃して行きます。必ず成就します。

どこでぶっ倒れてもいい」

と。それは未、完、成、の、完、成、と、い、う、こ、と、で、す。

「^{とむら}弔い合戦」とは「神聖なる復讐」ということ。もし成就しなかったら、私はキリストと一緒に、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と言いたいね。そうしたら、あなた方は私の屍しかばねを乗り越えて前進してください。そして、「小池先生、万歳！」とやってもらわなくては。めそめそしては困るよ。私はブラウニングと同じだ。絶対に、

「倒れるは立たんがため、眠るは起きんがため」

という。ブラウニングの「ザ エピローグ」という詩を青年は壁に掲げなさい。今の青年は少しそういうことをしなくてはいかん。私憤ではない。神さまの福音の憤りが、羔の憤りがそうさせる。仕方がない。パリサイに対してはキリストはどこまでも

「偽善なるかな、パリサイ人よ」

と、い、っ、て、マタイ伝23章で七度言い換えているでしょ。その偽善なる学者、パリサイ人、祭司、官憲、また民衆の煽動家。みんなそれを引き受けて、彼は十字架に架かってしまった。キリストの十字架のもの凄さというものは、私たちは本当にそれを瞑想するだけでも、ぶっ倒れてしまう。そうしたら、今度は聖霊が来る。

●黙って出かけた

望みのないときに、彼は神さまの言葉だからと言って望みをかけた。本願ほんねんに即つした。そうしたら、本当にその通りになった。しかも、そのいただいた独子のイサクを、また神さまは無理なことを言つて、「これを献げろ」と言う。胸突き八丁。あれくらい、信仰の試しを受けた者はまずい。創世記22章です。あの時はアブラハムも参った。何も言わない。黙って出かけた。あの黙って出かけたのは正ただに信まこと行な、一如ごとの行為なんです。そうして、正ただに屠ほふらんとした瞬間に、「アブラハムよ、アブラハムよ」と神の声がそれを制した。

空の星の如く子孫ができるただ一人の種を屠ほふつたら、どうするんですか。子孫ができません。神一切というのが本当の信の世界です。

ヨブもついにそこに到達せしめられた。

「エホバ与え、エホバ取り給う。エホバの御名は讃むべきかな」

と。やり切れないです。

19 斯おおよて凡おおよそ百歳に及びて己が身の死にたるがごとき状さまなると、サラの胎たいの死にたるが如きとを認むれども、その信仰よわらず、20 不信をもて神の約束を



疑わず、信仰により強くなりて神に栄光を帰し、²¹その約し給えることを成し得給うと確信せり。²²之に由りて其の信仰を義と認められたり。

棄身の信仰を認められた。信仰は本質的にはみんな棄身ですよ。もう、力が来てしようがない。私はこうやって語りながら、あなた方は聞きながら、どんどん力が来る。くたびれない。逆に力をいただく。どんな妙薬もこれにはかなわん。調子が悪くなればなるほど、逆に強くなってくださいよ。強くされるんですから。

「之に由りて其の信仰を義と認められたり」

なんていう訳が、間が抜けていて嫌になっちゃうんだ。

「義とされたり」

で結構です。

「義を与えられたり」

と言ってもいい。「認められた」どころのさわぎではない。

「審く義が与えられる義であった」

と言って、ルターが喜んだでしょ。

「神の義が福音のうちに現れた」

とは、その義が与えられるから。「義とされる」ということは、ただ認められるくらいの話ではない。

相手はアブラハムには神さまであつたけれども、私たちにはキリストなんです。この贖主——聖霊を与えるところの、甦りの生命を持ったところの——このキリストです。これを受けとれば、私たちの中にキリストの義が生きてくる。義なるキリストが生きてくる。愛なるキリストが生きてくる。これはみんなキリストの霊ですから。御霊の義であり、御霊の愛なんです。

そんなことを言う者はいないだろうね。だから、わざと私は今日、「信仰義認」なんて書いた。こんな「信仰義認」なんていうお題目ではダメですよ、と言うために書いた。聖書だって、「**儀文は殺し、霊は活かす**」

と言って、文字面でもつたいぶつたつてダメです。聖書の言葉は暗号なんだから。「義と認められたり」なんて言ったって、もつと奥を読んでいかななくては。私は根源語を読めと言っている。あんまり普通の信仰がダメだから。どうしても、使徒たちのこの次元に、キリスト、直結に行かなくてはダメです。

● 氣迫を捉む

²³斯く『義と認められたり』と録したるは、アブラハムの為のみならず、また我らの為なり。²⁴我らの主イエスを死人の中から甦えらせ給いし者を信する我らも、その信仰を義と認められん。²⁵主は我らの罪のために付され、我



らの義とせられん為に甦えらせられ給えるなり。

24節、25節は大事です。パウロもダマスコ途上でキリストにやつつけられたでしょ。だから、彼はこの甦ったキリストを信ぜしめられた。もう、信ずるも信じないもありはしない。彼は圧倒されてしまったんだ。このキリストに圧倒された。

「甦えったであろうか、どんな現象であつたらうか? いろいろ福音書によつて報道の仕方が違うが、これはどうだ、こうだ」

と、そんなくだらないことは要らない。ある一つの事柄を伝えるのでも、人によつてみんな違うでしょ。それだけの話だよ。「違うからそれは嘘だった」なんて、冗談じゃない。一人の人でも、四、五日前に言ったのと、今度言ったのと表現が違ってきたりするよ。「どっちが本当だろうか」なんて。そうじゃない、どっちも本当なんだ。言葉面をつかまえて、どうのこうの言うから、どっちが本当だろうかなんて言っているんだ。どっちも本当の世界から、ただ違った表現をしているだけの話なんです。そういう弾力性のあるものの捉み方ができないんだね。これは困つたもんだよ。心を、魂を、氣迫を捉んでくれなくては。

パウロが言っている通り、

「儀文は殺し、霊は活かすなり」

ということ。聖書も盛りきれない。

「聖書はかけらだ」

なんてルターも言った。あんなに「神の言葉」と言ったルターが「聖書はかけらだ」と言う。私はその言葉を見てびっくりした、また喜んだ。さすがはルターさんだなと。それではデラメかと。決して然らず。そういうことは御霊が来なくては分からない。

24 我らの主イエスを死人の中から甦えらせ給いし者を信ずる我らも、その信

仰を義と認められん。

「我らの主イエスを死人の中から甦えらせ給いし者に、もう圧倒されて、私たちも信

ぜざるを得なくなつてしまった」

ということだ。「信ずる我らも」なんて、偉そうな気持ちでこんな言葉を捉まえてはダメです。パウロも仕方なしに信ぜしめられて、圧倒されたわけなんですから。「その信仰を義と認められん」とは、

「信仰によつて義とされたのである」

ということ。

25 主は我らの罪のために付され、我らの義とせられん為に甦えらせられ給えるなり。

この「ために」はみな「ディア」という言葉が使つてある。「によつて」というのは原因と結果と両方をもっている。我々を義としようというわけで、その実体としてキリストは甦つた。「我々の義のために」というのは、



「義を与えるために」

ということ。「義のゆえに」というのは両方とも、キリストの復活が我々を義とする原因となり、また目的であったということ。この場合のギリシヤ語の「ディア」という言葉がほとんど「エイス」「中へと」という意味をもっている。

●無が即ち一如

十字架と復活は切り離すことはできない。しかも、義の内容が本ものとなるためには、聖霊が来なければならぬ。信仰と行為の問題も二段階でない。御霊が来ればわかる。行為を切り離して、行為として問題にしているときは、いつまでたっても始まらない。

「私はしようがないやつだなあ」

と、それでいい。しかし、しようがないやつが本当のことをやって行く。だから、「信仰義認」なんていうのは逆説的な言葉です。

「全面的に受けとることによって義を与えられる」

それが「信仰義認」の本当の内容です。義とは何か。申し上げている通り、キリストに100%に従って行くこと。受けとって従うから必ず力がくる。力が来るから、それを受けとって進むことができる。何をなさつていてもそうなんです。

だから、キリストは無者であつた。

「自分は何もできない、何も言えない」

と言つた人が一切のことをしてしまつたではないですか。即ち、無者というのは、

「自分を無として、神さまを100%に全として、無限無量とした」

それがキリストの信仰の姿なんです。無が即ち一如である。

「南無阿弥陀仏」とは、「阿弥陀」なる無量寿無量光なるもの(仏)に「南無」していくこと。「南無する」ことが信ずるということ、自分を投げ入れるということ。そうしたら、えらいことになって来たでしょ。楽しくつてしようがない。あなた方、それを毎日体験してくださいよ、本当に。パウロの 로마書4章を読みながら、ある意味においてパウロを超えてしまうんです。とにかく、 로마書は素晴らしいですからね。楽しみにしてください。

